

# 農林水産大臣賞受賞

夢の里たかた～地域に根差したむらづくり～

受賞者 たかたむら 高田村づくり委員会 いいんかい  
(みなみきゅうしゅうし 鹿児島県南九州市)

## ■ 地域の沿革と概要

鹿児島県の南西部、薩摩半島の南部に位置する南九州市は、平成19年12月に旧揖宿郡いぶすき額娃町、旧川辺郡えい知覧町及び川辺町が合併し誕生した市で、鹿児島市の南西約30kmにあり、南薩地域の中心部に位置している。

市の基幹産業は農業で、茶、さつまいも、大根などが生産され、特に茶は、栽培面積・生産量とも市町村単位で日本一の産地である。また、伝統地場産業である「川辺仏壇」は、国の伝統的工芸品の指定を受けるなど、全国でも有数の高い技術と歴史を有している。

第1図 位置図



## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

南九州市川辺町の中心地から3kmほどに位置する「高田」は、永里川流域にあり、西方に藤野原台地を擁している。高田村づくり委員会は、10自治会で構成する地縁的な任意団体であり、当地区では、名水百選及び水の里百選に選定された豊かな水を活用した水田農業や、「かわなべ牛」として商標登録されている黒毛和牛などの畜産を主体とした大規模経営体が育成されている。また、県内各地の墓石や井堰などの石材に使われる良質

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落の集合体(10集落)	
地区の性格	地縁的団体	
農家率 (内訳)		9.8%
	総世帯数	762戸
	総農家数	75戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家	13戸
	1種兼業農家	4戸
	2種兼業農家	7戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	810ha
	耕地面積	194ha
	田	73ha
	畑	116ha
	耕地率	24.0%
	農家一戸当たり耕地面積	2.6ha

な石が産出され、江戸期より高田石工の郷として石切場が栄えていた地域である。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

高田地区の藤野原台地では、昭和46年度からはほ場整備が開始され、畜舎の建設や水田を活用した飼料作物の生産が進み、畜産を主体とした大規模経営農家が育成されてきた。

しかしながら、耕作者毎の農地が分散していたことから、農地集積による経営の効率化を図るため、平成6年に「藤野原農用地利用組合」が設立され、農地の交換分合に取り組んだことを契機に、平成10年に話し合い活動の母体である「高田村づくり委員会」(以下、委員会という。)が結成された。本委員会を中心に、地域農業のシステム化の推進、住みよい明るい集落環境づくりを目標に、「むらづくり活性化計画」が策定され、県の推進する新・農村振興運動の重点地区に指定された。この計画に基づき、ほ場整備、集落環境整備を進めるとともに、地元小学校の食農教育支援や世代間交流、伝統芸能の継承などの活動にも取り組んできた。

その後、高齢化や担い手の減少が進んでいることへの危機感から集落営農に取り組むため、平成19年に「高田営農生産組合」を設立するとともに、勉強会や検討会を重ね、平成21年に水田農業・畜産を主体とした地域農業の重要な担い手となる集落営農法人として「農事組合法人土里夢たかた」(以下、(農)土里夢たかたという。)に移行させている。

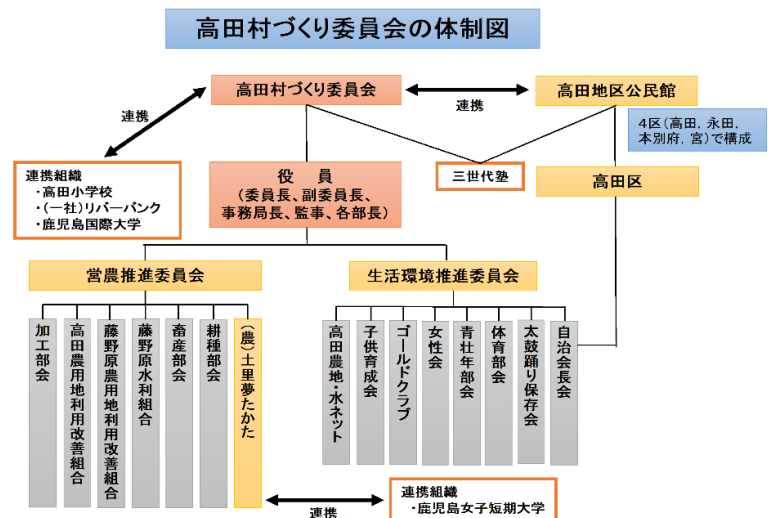
また、委員会では、地域のみを集落の維持は困難であると考え、「むらづくりは人づくり」の理念のもと、交流人口の増加や新たな人材確保に向け、多様な主体と連携したむらづくり活動を地域住民が楽しみながら積極的に取り組んでいる。

### (2) むらづくりの推進体制

#### ア 高田村づくり委員会

委員会は、委員長、副委員長、事務局長、監事と各部会の長で構成される役員会で全体的な調整活動や企画立案を行っている。役員は互選であるが、委員会と自治会と連携を図るため、副委員長は区長が担っている。

第2図 むらづくり推進体制図



委員会には、(農)土里夢たかたを含む7部会で構成する「営農推進委員会」と8部会で構成する「生活環境推進委員会」の2つの委員会があり、委員会と各部会が連携して各種事業を実施している。

## イ 多様な主体と連携したむらづくり

委員会では、「子どもは地域の宝」という青少年育成のスローガンのもと、高田小学校と連携して、教育支援に関わっている。米や野菜作りなどを通じた食農教育で小学生が育てた農作物は、地区内外の人々と交流する秋の収穫祭に提供されている。

また、地域の文化や歴史を体験し実践する場として、児童、保護者、高齢者の三世代の組織と連携して、共に学ぶ「高田三世代塾」を平成14年から毎月開催している。塾では、そば打ちや伝統芸能「太鼓踊り」など地域の食や文化を継承しながら、子ども達へ地域のバトンをつなぐ活動を行っている。

さらに、都市農村交流を図るため、都市部の消費者と連携して、田植え、稲刈り、みそ作りなどの体験を企画するとともに、鹿児島女子短期大学と連携して、さつまいも、大豆の生産や農産物を活用した加工品開発を行っている。

また、リバーバンク森の学校（旧長谷小学校廃校跡地）を拠点として地域づくりに取り組んでいる「一般社団法人リバーバンク」と連携して、共催する「森の収穫祭」や全国的な野外フェスティバルである「グッドネイバーズ・ジャンボリー」では、伝統芸能である「太鼓踊り」などを披露するなど、来場者に高田の魅力を発信してファンづくりを進めている。

さらに、地区在住の鹿児島国際大学教授やその学生と連携して、空き家の良さを見直し活かす視点で改修を行う「空き家対策プロジェクト」を展開している。委員会が空き家調査や家主との調整活動を行うことにより、移住者の定住・定着を支援している。



写真1 高田三世代塾（そば打ち体験）

## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

委員会は、地域の自主的な話し合いを基本に、創意工夫を重ねながら、集落の再生や都市農村交流などを通じたむらづくり活動を展開している。

地域を取り巻く環境が変化する中、農業・農村を持続させていくための長期的な視点に立ち、根気強く地域の合意形成を図り、住民の信頼関係を築き、集落営農法人へと着実に経営発展を進めており、農地を守っていく推進体制

づくりができたことで、農地を預けられる安心感と更なる地域の一体感が生まれた。また、集落営農法人への雇用を通して、地域農業を担う若手後継者を確保するとともに、その育成にも積極的に取り組んでいる。

さらに、「地域のみ活動だけでは存続は危うい」という住民の危機感・先見性から、地域の非農家も巻き込みながら、地域内外の多様な主体と連携し、高田の魅力を広く発信してきた活動は、高田へのリピーターと移住者の増加につながるとともに、「人が人を呼ぶ」新たな循環を生み出している。

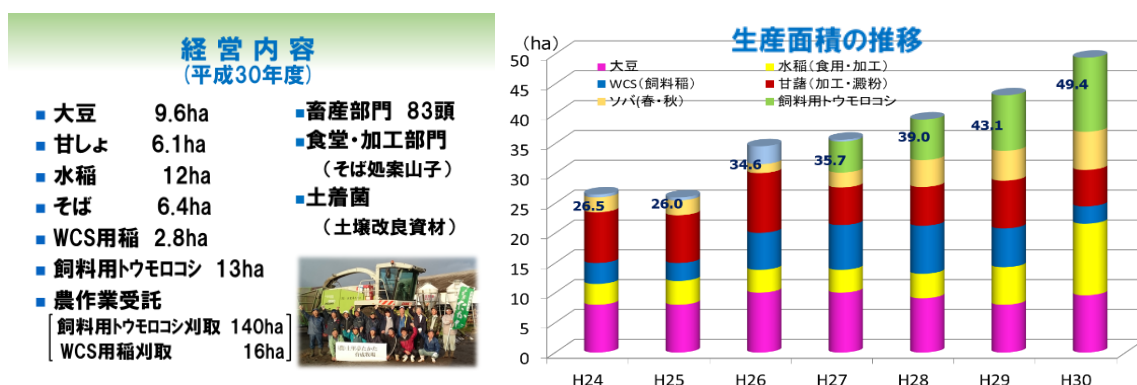
このことは、何度も話し合いを重ね、苦労して地域をまとめていった地区リーダーや住民の経験が、移住者に対して寛容で、住みやすい環境を醸成したものと考えられる。今後、若者や移住者など多様な人材が地域活性化の担い手として活躍していくことが大いに期待されている。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) むらづくりと一体的に取り組む(農)土里夢たかたによる地域農業の維持・発展

委員会の話し合いにより設立された高田営農生産組合は、「地域資源を生かし、集落営農によるコスト低減・機械化による労力軽減を図り、地域農業を発展させていく」ことを目指して、平成21年に(農)土里夢たかたとして法人化された。法人の役員を委員会の役員が兼務しており、むらづくりと一体的に取り組む体制となっている。

水田農業を主体にスタートした経営は、大型機械の利用による地区内外での飼料作物の農作業受託に取り組むとともに、平成28年からは地区内の廃業した酪農家の畜舎を利用して、乳用牛の育成事業を開始するなど、経営の多角化を図ることにより、地域農業の担い手となっている。さらに、法人の事業拡大に対応して労務環境を整え、「農の雇用事業」の活用により、若者4人を雇用している。ほ場・畜舎での作業や各種研修会への参加により技術習得の支援を行いながら、若者が意欲をもって働ける環境づくりに努め、地域農業の後継者の育成に取り組んでいる。



第3図 地域営農を牽引する(農)土里夢たかたの経営概況

### (2) スマート農業導入による新たなチャレンジ及び人材育成

(農)土里夢たかたでは、令和元年から、国のスマート農業加速化実証プロジェクトを活用して、産学官連携により中山間地域における水田の高度利用技術省力化と乳用牛育成管理省力化に取り組み、その効果を実証するなど、スマート農業を導入した新たな営農にチャレンジしている。

また、プロジェクトの実施をできるだけ若者に任せ、若手の自覚や責任感を醸成することで次世代の人材育成にも努めている。

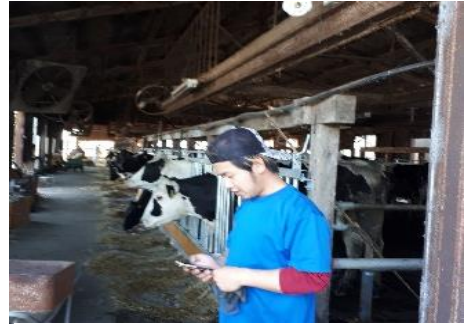


写真2 スマート農業の導入  
(牛舎監視システム)

### (3) むらづくりにおける女性の役割発揮と所得向上 ～「そば処案山子」の運営～

委員会の加工部の女性が、地域で生産された大豆を活用して押し大豆やみそなどに加工し、道の駅等で販売している。

さらに、平成28年には、農協出張所跡地を活用して「そば処案山子」をオープンし、飲食店のない高田において、高齢者、若者など住民の交流の場となっている。現在、週2回、地域の女性達が地元産の手打ちそばや大豆加工品の販売を行っており、今後は、女性の知恵と技術を生かして営業日を増やし、地元の農産物の付加価値を高め、更なる所得向上を目指すこととしている。



写真3 地域の拠り所「そば処案山子」

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 食農教育や交流活動による地域コミュニティの活性化と高田のファンづくり

高田小学校と共催で行う「高田かがやきフェスタ」は、地域内外から多くの人々が訪れ、交流の機会となっている。また、「高田三世代塾」では、子ども達へ郷土愛の継承や、高齢者の生きがい活動の場となっており、世代を超えた地域コミュニティの活性化にもつながっている。

このような交流活動や前述の多様な主体と連携したむらづくりの取り組みにより、鹿児島市内の若い夫婦が高田で働きたいと移住し、(農)土里夢たかたの社員として働くなど、新規就農者や移住者の増加につながっている。



写真4 小学校と共催する高田かがやきフェスタ

## (2) 空き家対策プロジェクトによる移住促進

空き家対策プロジェクトと連携した取り組みにより、平成29年以降、新たに4家族10人が移住している。委員会では、移住者が地域に馴染めるよう常に声掛けを行っており、移住者は太鼓踊りや地域の音楽グループ、空き家対策の作業メンバーに参加するなど、地域に溶け込んでいる。服飾デザイナー、グラフィックデザイナーなど「多様な移住者」が、今後、地域活性化を担う新たな人材となることが期待されている。



写真5 大学と連携した「空き家対策プロジェクト」

## (3) 地域資源の磨き上げ ～高田の命水、石切場～

高田には、閉山した「高田石切場」やその近隣に昔からの「水汲み場」があり、委員会では、この地域資源の磨き上げに取り組んでいる。「水汲み場」を「高田の命水」として観光スポットに整備したことで、観光客が増加するとともに、「水汲み募金箱」の設置により自主財源の確保にもつなげている。

また、荘厳な雰囲気のある「高田石切場」では、地元出身の女性彫刻家が在籍する東京学芸大学の主催で「国際彫刻シンポジウム」が開催され、各国からの来訪者を委員会が「おもてなし」することで、国内外へ高田の魅力発信を行っている。現在は、石切場での音楽会の開催などを計画している。



写真6 高田石切場で開催された彫刻シンポジウム